

医師になろうと思ったのは、病める方を救いたいという気持ちからだ、それがすぐに果たせるわけではなく、多くの修練や学習を必要とした。猛省や自戒も多いが、使命感と責任感を常に胸中に掲げて医道にまい進した。視野が広がって、最新の医学に精通することこそ肝要と思いつつ、医師こそ世界を豊かにして、多くの引き出しを持つ必要があることも感じてきた。

医学は科学であると同時に、人間学そのもの。体を知ることが自分を知ること。すると、当たり前の日常に多くの感動が潜んでいることを知る。かみ碎き、飲み込めるだけでも尊い機能。よって、外科学を通じ、医療と日常の文化とを考察することも、私のライフワークの一つとなった。とりわけ、消化管には多くのことわざや格言があって、それだけ消化・吸収という仕組みが、健康の重要なテーマであることも、われわれの生活と密着しているこ

民報 サロン

とを物語っている。

まず口。飲食可能か判断する最初の関所となる。よくかむことが必要で、「かんで含める」とは、その大切さを言う。しかし、気分が乗らないと「砂をかむ」ような思いになる。飲み込んで食道へ。人生でも、うっかりすると「喉元過ぎれば熱さを忘れる」。それ

ら栄養吸収のメインステーションである小腸へ。次は大腸へ。体の急所の一つでもあって、人の性根を指すこともある。「腹をくぐる」なども言う。心の状態と密接である故に「断腸の思い」の言葉がある。消化管は整然と分業化された食物解体吸収工場で、全長約10メートルもある。複雑で巧妙。

口から腸までの学び



柿沼 雄二

から胃に。胃は消化作業の一時処理工場。胃酸を分泌し、かき混ぜて全ての食材をかゆ状にする。胃は五臓六腑(ろっこの一つ)。「腑」は、大阪府などの「府」に「にくつき」が付く。いわば、体の中の町。納得がいけば、胃という「腑に落ちる」が、合点がいかないと「腑に落ちなく」となる。それか

それら偉大な消化管に手術で挑んできた。通過障害などがある方にまた食べられるようになってほしいという使命感は、大きな原動力であった。術後に水を飲んだ方に「先生、うまい」と言われた時の感動も忘れられない。改めて、体というものをいとおしく感じ

を入れぬ人体こそ最も発達完備した个体であろうが、良心の命ずるところに従い、敢然としてわれわれがメスを握らねばならぬ局面はある。進んでこれに当たり、希望や喜びを分かち合う。患者さんや外科医仲間ら「心腹の友」と語り合う。その際は共に、早食い、大酒、塩分過多、喫煙、食休みなしは避ける。腹は八分目。腹も身の内。これからも、命あることを慈しみ、心に廉潔なアンテナを持ちながら、感動を拾っていく。大切なことを、かんで含めて、腹を割って語り合う。肝を冷やさず、息をのむような、良き時間を味わい合えることを望む。外科医であったことで、早期に病を見つけることができれば、治療も軽微であることが実体験してきた。そのためにも、早期発見、予防医学の意義を発信し、PET健診や脳ドックの素晴らしさを広めたい。(郡山市赤木町、総合南東北病院医師)